

項目	重点目標	自己評価		学校運営協議委員会における意見
		取組・成果・課題	改善策・対応策	
信 頼 さ れ る 学 校 づ く り	<多様な他者の理解>	<ul style="list-style-type: none"> ・共生社会教育を言語通級指導学級と特別支援教室から実践し、6年間を通じて学習機会を作ることができた。 ・高学年児童の82%が「思いやりの心をもって生活している」、81%が「違う考え方や気持でも受け止めている」と肯定的な回答をしており、児童間の受容を感じとれる。 ・保護者アンケートでは、「障害者、外国人、性的マイノリティ等の人権に関する多様な価値観について学んでいる」の設問で34.8%が「分からない」と回答している。 	<ul style="list-style-type: none"> ・「児童が考え、気付く」の視点から共生社会教育の計画をブラッシュアップする必要がある。 ・友達と共に協働的な学習を重視する学習の進めた方を推進する。 ・保護者会等で各種教育活動の実践を紹介していく必要がある。 	<ul style="list-style-type: none"> ・拠点校であることは、児童にとってありがたい環境なので今後も連携してほしい。 ・学年だよりが差し替わるとすると、授業の取組をテトルで配信してもよい。保護者向けに共生社会に関わる学習会の開催やゲストティーチャーの招聘もある。 ・多様な他者の理解の場面は、日常的には少ないため、道徳や学活で触れててもよい。 ・設問の表現の検討が必要である。
	<安心して登校できる環境づくり>	<ul style="list-style-type: none"> ・高学年児童の81%が「学校へ行くのが楽しい」、87.5%が「友達や先生との学習が楽しい」と回答している。また、76%が「困ったことがあつたら相談できる人がいる」と回答している。 ・保護者の74.3%が「子どもは学校を楽しんでいる」と回答しているが、児童アンケートの回答も含め、90%台に引き上げる工夫が必要である。 	<ul style="list-style-type: none"> ・児童を孤立させない環境づくりや事案に対してスピード感ある対応ができる体制づくりが必要である。 ・児童の躊躇を、学業、人間関係、集団参加の視点から分析し、自己有用感、自己肯定感、所属感の向上を図る。 	<ul style="list-style-type: none"> ・SCの有効活用を図り、平時より相談できる人がいることを周知する。 ・90%への引き上げも大事だが、不登校支援教室の運営や児童の願いを吸収できるようにしていくよい。 ・学習や人間関係の学びの場である以上、楽しいだけではない面もある。先生が余裕をもって児童に関われるよう区にも要望したい。
	<いじめの未然防止・早期発見・早期対応>	<ul style="list-style-type: none"> ・学期に1回のアンケートを実施し、訴えがあった場合は、個別にヒアリングを行い実態の把握や解決に当たっている。児童同士の関係性について、きめ細かに報告できる仕組みづくりが必要である。 ・保護者の35.2%が「いじめを許さない雰囲気がある」と肯定的な回答を示す一方で、38.2%が「どちらともいえない」となっている。 	<ul style="list-style-type: none"> ・保護者会等で、重大事案に発展しないための初期対応の重要性を説明し、共に解決していく協力関係の構築を図る。 ・生活指導部の定期会議において、学年状況を把握し、未然防止・即時対応ができるようにする。 	<ul style="list-style-type: none"> ・いじめゼロは難しいので、起きた時に対応が重要である。CSへの相談や取組の掲示などを行っていくことが肝要である。 ・保護者に学校の基本方針や相談の旨を発信してほしい。逆に、低いということは、いじめが少ないと考えられる。 ・未然防止の取組や家庭内でのコミュニケーションを奨励していくことも必要である。
<学校運営協議委員会の意見を受けての重点方針>				
<ul style="list-style-type: none"> ・学校生活がより楽しいものになるように、児童の主体的な活動が広がるよう工夫改善を図る。 ・いじめの対応については、その対応方針や相談窓口を紹介し、早期対応ができるようにする。また、不登校支援について、生活指導、教育相談コーディネーターを中心に、短期的・中期的目標の設定やソーシャルスクールワーカーの活用、支援員との連携のあり方について改善を図り周知を行う。 				

項目	重点目標	自己評価		学校運営協議委員会における意見
		取組・成果・課題	改善策・対応策	
学び 合 える 学 校 づ くり	<学びに向かう意欲・態度と習得・活用・探究の学習・個別・協働的な学び>	<p>・児童アンケートでは、80%が「分からぬ時は、他の人や先生に質問して、解決している」、88%が「集中して学習に取り組んでいる」、89%が「分からぬことがあっても、学習を続けるようにしている」、87%が「問題や活動に取り組んで、できた、分かった、と感じることが多い」、88%が「必要な時に必要な仲間と協力しながら学んでいる」と回答しており、学びに向かう力、協働的な学びは良好である。</p> <p>・75%が「自分の興味にもとづいて問や課題を立てて学んでいる」、77%が「学習の方法やペースを自分で選んだり、決めたりしている」、78%が「他の授業で学習した内容を生かして考える時間がある」、60%が「分からぬことがあれば、先生が自分に合わせて教えてくれる」と回答している。保護者アンケートでも68.7%が「学ぶことで、毎日の生活を自分でよりよくするために考えている」と回答している。協働的な学びに対して、個別的な学習の進め方に改善が必要である。</p>	<p>・教員アンケートの結果も踏まえ、課題や学習段階において、個別的な学習や協働的・一斉的な学習等、学習過程における適切な学ばせ方の選択を適切に行わせることで、児童の学びに向かう意欲の向上を図る。</p> <p>・校内研究の場を活用しながら、カリキュラム・デザインの完成と学習過程の改善を行い、習得・活用・探究の学習、個別・協働的な学びの充実を図る。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・「考え」 - 「話し合い」 - 「共有」というサイクルの中で、自己分析や他者からの刺激が他者の承認につながり理解がより深まる。 ・「困った」を解決する手立てを考え、チャレンジさせることで学びが定着していく。 ・児童には、個別に教えて欲しい、構って欲しいというニーズがあるのかもしれない。 ・自分から質問できずにいる児童が一定数いるとすると、そこは見逃さずにフォローしてほしいが、質問をしやすいと感じている児童も多いことに驚き、先生の姿勢が分かった。 ・総合的な学習の実践を見ていると、有意義なものを感じる。 ・地域や保護者に対して、「学んでいる姿」「学んだことを使っている姿」を見せる必要がある。
	<地域・家庭連携と社会参画の意識>	児童アンケートでは、70.5%が「自分のやりたいことを応援してくれる身近な地域の人がいる」、87%が「誰かの役に立ったり、自分の役割を果たしたりすることはうれしい」と回答しており、生活に対して安定かつ前向きな姿勢が見受けられる。学ぶ動機も、「将来の仕事や生活に役立つから（肯定87%）」となっており、社会参画を見通した学習活動の可能性の高さがある。	・学校支援本部の協力を得た地域の人材・フィールドを広く活用した学習活動や教科横断的な指導を継続し、身近な地域社会における課題解決やモデルとなる大人像を学ぶ機会の充実を図る。	<ul style="list-style-type: none"> ・児童が思う「やりたいこと」を明確にさせていくことで、地域の協力も得やすくなる。 ・学校支援本部は、なくてはならない存在である。直接、児童に関わっているのはよい。 ・地域の方は、昔からなので引き継いでやってもらいたい。 ・地域行事への参加は、もっと高いように思う。
<学校運営協議委員会の意見を受けての重点方針>				
<ul style="list-style-type: none"> ・個や仲間との学習のバランスを意識した学習過程を工夫や児童が学習を振り返る機会の充実を図り、主体的に学ぶ児童を育成する。 ・校内研究での成果を全教員で共有し、単元、本時の中で活用できるようにする。 ・学校支援本部との連携を計画的に行い、持続可能な地域との協働的な教育活動を継続する。 				

項目	重点目標	自己評価		学校運営協議委員会における意見
		取組・成果・課題	改善策・対応策	
で明 きる るく 学、 校元 づ気 くで り、 前 向 きに 過 ご すこ とが	<体力・健康>	<ul style="list-style-type: none"> ・のびのび体操や持久走週間、運動委員会提案によるドッジボール大会を行っている。体力運動能力調査では、全国平均比で握力が低位であり、高学年ではボール投げ・立幅跳が低い。保護者アンケートでは、「多様な遊具をそろえたりしている」の設問で37%の肯定的な回答となっている。 ・児童アンケートでは、情報機器の使い方について、70%が「スマートフォンの使用など、健康に気を付けた生活を送っている」となっている。 ・食について児童の87%が「給食はおいしく楽しみ」と回答している。低学年では野菜の皮むき体験の実施や委員会活動及び栄養士からの情報提供による食への意識向上を行った。 	<ul style="list-style-type: none"> ・引き続き体育専科を配置し、委員会活動提案の遊びの充実によって、運動に親しむ機会の充実を図る。 ・情報教育の観点から情報機器との付き合い方について学ぶ機会を計画的に行う。 ・食育リーダーを中心に委員会活動と連携して食や食文化、食農指導の機会の充実を図る。 	<ul style="list-style-type: none"> ・マラソン、のびのび体操のように全校で取り組むものがあるとよい。遊ぼう会の活用もある。 ・楽しみながら様々な運動を経験させることが大切である。体育専科を生かして経験させたい運動をまとめておくのはどうか。 ・給食予算の課題が解決し安心した。献立は素晴らしい、物価高もあるが維持願いたい。 ・給食は喫食時間の確保が必要である。 ・情報機器については、保護者への教育も必要で学校で扱う範疇の検討が必要である。ゲストティーチャーも有効である。
	<学校生活に対する意識>	<ul style="list-style-type: none"> ・児童アンケートでは、86%が「学校の決まりを守っている」84%が「自分から挨拶している」と回答している。家庭学習の定着率も高く、安定した生活実態の様子が分かる。 ・生活指導上の課題については、毎週末教員間で振り返りを行い、課題の分析と次週の取り組み目標を決定し、全校朝会で目標の共有や評価を行っている。 ・児童アンケートでは、62.5%が「今の学校の皆なら協力して、全員が通うことが楽しくなる学校を作れると思う」と回答しているが、社会参画の意識と比べると低位にある。 	<ul style="list-style-type: none"> ・生活規範に対する意識の高さがあるため、今後も場に応じた振る舞いを考えさせていく必要がある。 ・特別活動を中心に集団における合意形成や課題解決を行い、よりよい学校・学級づくりの経験を積ませていく必要がある。 	<ul style="list-style-type: none"> ・決まりの遵守は、来校者全員が手本を見せる必要がある。設問にも反映させてよい。 ・学校での経験が家庭や生活の中でも使えるように実践させ自立心を自立心を高めたい。 ・縦割班活動が盛んなので、異学年が触れ合う機会や上學年を見本として学ぶ場が充実していて、成果は大きい。 ・素晴らしい成果が出ている。
<学校運営協議委員会の意見を受けての重点方針>				
<ul style="list-style-type: none"> ・情報機器の扱いについては、文科省発信の動画資料を活用しながら、全学年で計画的に考えを深める機会の充実を図る。 ・特別活動における縦割班活動や学級活動等を通じて、児童の思いや願いが実現できるような工夫を行う。 ・学校栄養士、食育リーダー、委員会担当者との連携を図らせ、学期に食に関する指導の充実を図る。 				